

カート・ヴォネガットの『スローターハウス・ファイブ』
における自由意志と正戦論

森 本 奈 理

Free Will and the Theory of Just War
in Kurt Vonnegut's *Slaughterhouse-Five*

MORIMOTO Nari

In this thesis, I am suggesting that Kurt Vonnegut's *Slaughterhouse-Five* (1969) depicts the repetitious process of the re-creation of a Jesus Christ who parodies his predecessor in postmodernistic ways. Billy Pilgrim, the newly-born Jesus, has no connection whatever with the existing God and, therefore, all his actions come exclusively from his own "free will," not from the destiny which He bestows on him. Since Billy has such an unlimited free will, he is able to perform the theory of "just war," whose conception of "incombatant immunity" Billy depends on to criticize Dresden bombings and the Vietnam War, both conducted by U.S. military forces; Billy experienced the former in World War II and witnesses the latter "now," when Vonnegut was writing *Slaughterhouse-Five*.

【キーワード】

スローターハウス・ファイブ、カート・ヴォネガット、自由意志、構築主義、正戦論

はじめに

カート・ヴォネガット Kurt Vonnegut の代表作『スローターハウス・ファイブ *Slaughterhouse-Five*』（1969）は、作者自身が第二次大戦中に体験した「ドレスデン爆撃」をサイエンス・フィクションの形式で扱った物語で、その発表当時、西側諸国ではほとんど知られていなかった「ドイツ一般市民に対する虐殺行為」を世に紹介した作品である。しかし、一読すれば分かる通り、肝心のドレスデン爆撃を報告する部分はわずかであり、作品を主に構成しているのはその虐殺に対する主人公ビリー・ピルグリムの内面の葛藤である。この苦悩を一言でまとめると、「人間に自由意志は存在するのか」という問題に行き着く。もし人間に自由意志があるのならば、ドレスデン爆撃や広島・長崎への原爆投下といった残虐行為を決定し実行する主体とは「（良心ある）人間」と呼び得るのか。また反対に、人間に自由意志がなく、人間の行為の全てが予め神によって決定されているのならば、人間はいかなる「罪」ゆえにこれほどの「罰」を被らなければならないのか。そもそも、自由意志を持たない「存在」に「罪」を問い得るのか。こうした倫理的な問いをめぐる思索こそが『スローターハウス・ファイブ』の底流をなしており、この論文ではそうした深層構造を明らかにしたい。

むろん、神の思し召しか人間の自由意志かという問題は、この論文で扱っているほどには完全な二項対立になっておらず、植民地時代のアメリカの宗教家ジョナサン・エドワーズ Jonathan Edwards が主張したように、「人間の行動のある部分は神によるもの、その他の部分は自由意志によるもの」と考えるほうがシグムンド・フロイト Sigmund Freud の精神分析（人間の心理を「意識」と「無意識」の折衷だと捉える思考法）になじんでいる現代人には穏当なのかもしれないが、『スローターハウス・ファイブ』という物語では、神による決定論と人間の自由意志

は二律背反をなしており、私はこれら二者の関係性を論じようとしている以上、「神か人間か」というクリアカットな二項対立を設定せざるを得ないのである。

そして、結論を言えば、『スローターハウス・ファイブ』において、作者ヴォネガットは個々の人間に確固たるアイデンティティーを付与する既存の「神」を否定し、人間の自由意志を全面的に擁護するので、主人公ビリーは自らのアイデンティティーを必要に応じてその都度構築していかなざるを得ない、ということである。ここでは、こうした「自由意志のロジック」、「起源なき生産」を反復し続けなければならない「パフォーマンス／行為遂行的な performative」人間存在の様態を明らかにしていきたい。

I. ポストモダンのブラック・ユーモリストとしてのヴォネガット

先述した問い「人間に自由意志はあるのか」に対するビリーの回答は「ノー」であり、このことを証明するのにビリーが持ち出すのは、トルファマドール星人との遭遇である。物語の終盤で、飛行機墜落事故から奇跡的に生還したビリーは、入院中の同室者ラムフォードから爆撃に対する倫理的な反応を尋ねられ、次のように答える。

“It *had* to be done,” Rumfoord told Billy, speaking of the destruction of Dresden.

“I know,” said Billy.

“That’s war.”

“I know. I’m not complaining.”

“It must have been hell on the ground.”

“It was,” said Billy Pilgrim.

“Pity the men who had to *do* it.”

“I do.”

“You must have had mixed feelings, there on the ground.”

“It was all right,” said Billy. “*Everything* is all right, and everybody has to do exactly what he does. I learned that on Tralfamadore.” (198)

あらゆる人々の行為はそれを実行するよう命ぜられたものにすぎない。要は、人間の行為はその自由意志からくるものではない、ということだが、ビリーはこのことをトラルファマドール星で学んだのだという。

ビリーにとって、自由意志の問題は非常に大きなものだったので、彼はトラルファマドール星に拉致されて、そこに住む宇宙人と遭遇するとすぐにこのことを会話に持ち出している。それに対して、宇宙人は以下のようにまとめる。

“If I hadn’t spent so much time studying Earthlings,” said the Tralfamadorian, “I wouldn’t have any idea what was meant by ‘free will.’ I’ve visited thirty-one inhabited planets in the universe, and I have studied reports on one hundred more. Only on earth is there any talk of free will.” (86)

この宇宙人によれば、地球以外の130の惑星には自由意志が存在しないということである。そして、宇宙人は自由意志なるものの存在をきっぱりと否定する。というのは、トラルファマドール星人は4次元世界の住民で、その視点からすれば、「時間」とは「現在」時の連なりにすぎず、その全体を一望することさえ可能だからである。このように、全ての事

象の始まりと終わりを知るトラルファマドール星人にしてみれば、全ての出来事は常に既に決定されており、それがそうである以上、世界に自由意志が存在する余地はない、ということになる。

とりあえずは、ラムフォードとの対話を文字通りに受け取って、ビリーがトラルファマドールの「決定論」を堅く信じているとして論を進めよう。この場合、彼は「人間の善性」を問題視しなくてすむことになる。ドレスデン爆撃を計画し実行したアメリカ人やイギリス人は、それがいかに残虐な行為であったにしろ、予めそうすべく決定されていたことを実行したにすぎないのだから、彼らを倫理的に非難することはできないし、そうする必要もない。しかし、この場合、倫理的な責任はドレスデン爆撃の実行者ではなく、彼らにそうせよと命じた「神」に向かうことになる。むろん、神は全能であるがゆえに、不条理に過酷な罰を人間に与えることも、その反対に「身に余る光栄」を与えることも自由である。人間が善行を積み重ねたからといって、彼・彼女が神によって救済されるわけではない。その一方で、人間が罪を重ねたからといって、彼・彼女が神によって救済されないわけではない。もしも善行を積み重ねてきた人間が「必ず」神によって救済されるのであれば、「無限」なる存在の神を「有限」なる存在の人間のロジックに従わせることになり、これでは神の万能性が保証されない¹。よって、人間は倫理的な責任を神に負わせることはできない。

だが、ここで注意すべきはビリーがそのように考えておらず、神に対しても倫理的な責任を問わなければならないと思っているということである。だからこそ、ビリーはキルゴア・トラウトという不人気作家のサイエンス・フィクションを読み耽るのである。

The man assigned to the bed next to Billy's was a former infantry captain named Eliot Rosewater. Rosewater was sick and tired of being drunk all the time.

It was Rosewater who introduced Billy to science fiction, and in particular to the writings of Kilgore Trout. Rosewater had a tremendous collection of science-fiction paperbacks under his bed. He had brought them to the hospital in a steamer trunk. (100)

第二次大戦後、ビリーは精神に変調をきたし入院を余儀なくされるが、その際の同室者がエリオット・ローズウォーターであり、知識人のローズウォーターは病室にトラウトの作品を大量に持ち込んでいる。

ちなみに、『スローターハウス・ファイブ』において、入院中のビリーの隣のベッドに寝ている男は皆、ビリーの人生に深く関わる人物である。時系列に沿って見ていくと、最初にくるのが戦時中のちっぽけな病院で隣り合わせるポール・ラザロであり、彼は「裏切り者のユダ」よろしく、戦後、ビリーの命を奪いにやってくる。(ラザロ本人からそのことを繰り返し教えられていたビリーは自らの死と復活を預言し、それを的中させる。むろん、後述する「タイム・トラベル」により、ビリーは自分の死をすでに目撃しているのだが。) その次がローズウォーターであり、最後がラムフォードである。

それはさておき、数多あるトラウトの著書のなかでビリーに最も大きな影響を与えた作品は『宇宙からの福音書』という小説で、これは人間の残虐性の責任を神に負わせる物語である。

So Rosewater told him. It was *The Gospel from Outer Space*, by Kilgore Trout. It was about a visitor from outer space, shaped very much like a Tralfamadorian, by the way. The visitor from outer space made a serious study of Christianity, to learn, if he could, why Christians found it so easy to be cruel. He concluded that at least part of the trouble was slipshod storytelling in the New Testament. He supposed that the intent of the Gospels was to teach people, among other things, to be merciful, even to the lowest of the low.

But the Gospels actually taught this:

Before you kill somebody, make absolutely sure he isn't well connected. So it goes. (108-09)

トラウトによれば、キリスト教徒が戦争を非常に好むのは福音書の記述が残虐行為を助長するものになっているからだ、ということである。我々はイエス・キリストを磔刑に処すべきではなかった。なぜなら、彼は宇宙で一番力のある存在者「神」とのコネクションを持っているからである。このことを裏返すと、神とのコネクションを持たない一般人は殺しても構わない、ということになる。そして、実際に、キリスト教徒は「十字軍」や二度の「世界大戦」、「ヴェトナム戦争」などで膨大な数の人間を殺してきた。(『スローターハウス・ファイブ』の副題は「子供十字軍」、小説の主な舞台も第二次大戦時のヨーロッパ大陸というキリスト教世界であり、ヴォネガットの小説執筆時にはキリスト教国アメリカがヴェトナム戦争を遂行していた。)

このことを問題視した宇宙人は地球人に新たな福音書を贈る。そこで

は、神とのコネクションを一切持たない預言者が登場し、彼も結局は磔刑に処される。だが、そのとき、突如として神が人間世界に現れ、「その預言者を自らの養子にする」と宣言する。これにより、従来の福音書が禁ずる「コネクションのある人物の殺害」だけでなく、「コネクションのない人物の殺害」も禁じられることになる。

そして、この新しい福音書の預言者に当たる人物がビリー・ピルグリムなのである。彼は新しい時代のイエス・キリストなのであり、ポストモダンな言い方をすると、イエス・キリストの「パロディー」なのである。要するに、『スローターハウス・ファイブ』というSF小説は新約聖書中の4福音書のパロディーである、ということだ。第二次大戦中のベルギー戦線で「タイム・トラベル」能力を獲得したビリーは、それを活かして数々の預言を行う。その最たるものがトラルファマドールの時間概念に基づいた「死の超克」である。検眼医ビリーは診察中の少年の父親がヴェトナム戦争で戦死したことを知り、少年をこうなぐさめる。

While he examined the boy's eyes, Billy told him matter-of-factly about his adventures on Tralfamadore, assured the fatherless boy that his father was very much alive still in moments the boy would see again and again.

"Isn't that comforting?" Billy asked.

And somewhere in there, the boy's mother went out and told the receptionist that Billy was evidently going crazy. (135)

トラルファマドールの時間概念では、「現在イコール過去」である以上、全ての瞬間が永劫不滅であり、現在の死者も現在では「良くない状態」にあるが、それ以外の多くの時間においては「良い状態」にあるの

だから、我々は死を恐れ悲しむ必要はないのである。(従って、トラルファマドールの時間概念は「数珠 “beads on a string”」と形容されている (27)。そうすると、トラルファマドールの時間概念は東洋思想的な「輪廻転生」に近い概念だと言えようか。)

むろん、ビリーは「荒野からの／荒野における預言者」なので、彼の説教にはほとんど誰も耳を貸さないし、戦友ラザロに至っては面白半分にビリーを殺害する²。ビリーは自らの預言通り、1986年2月13日にラザロによって殺されるが、死の瞬間には1945年の捕虜収容所へとタイム・トラベルし、そこの病院で健康を取り戻すのである。このように、ビリーはイエスとは異なり、神とのコネクションを持たない「ただの人 everyman」ではあるが、神と同等の能力を持つトラルファマドール星人の時間概念を知っていたことで「復活」を果たすのだ。神とのコネクションを持たない「ただの人」も殺してはならない。なぜなら、彼・彼女も死の瞬間に神とのコネクションを築くかもしれないからだ。これがトラルファマドールの小説『宇宙からの福音書』のメッセージである。

ここまでの議論をまとめておくと、ヴォネガットの『スローターハウス・ファイブ』は新約聖書の福音書をパロディー化した、典型的なポストモダン小説であるということだ。しかし、ヴォネガットはナサニエル・ウェスト Nathanael West とは違って、「暗い／黒い笑い」に終始する作家ではない。従って、この論文の残りの部分では、『スローターハウス・ファイブ』のもう一つの側面に光を当てていきたいと思う。

II. リベラル・ヒューマニストとしてのヴォネガット

従来からの解釈では、『スローターハウス・ファイブ』は自由意志を否定する徹底して決定論的なテキストだとされてきたが、これはあまりに表面的な解釈である³。そもそも、フロイトの精神分析における「否

定」機能に着目すれば、ピリーがわざわざ「自由意志」を持ち出し、それをトラルファマドール星人に否定させている時点で、作者ヴォネガットは自由意志の存在を信じていることになる。もしヴォネガットが自由意志に全く興味がなく、その存在を信じていなければ、それを自身の小説でわざわざ取り上げる必要はないからだ。人間は全く興味のないものを話題にできない以上、「Xでない」という否定形であっても、Xを話題に取り上げるということは、Xについて強い興味を持っているということを示している⁴。

しかし、『スローターハウス・ファイブ』においては、フロイトの「否定」理論に頼らずとも、自由意志の存在を証明することができる。もっと正確に言えば、そうするために、これに先立つ部分で『スローターハウス・ファイブ』という小説が新約聖書の福音書のパロディーであることを長々と論じてきたのである。「小説内小説」である『宇宙からの福音書』によれば、この「新しい福音書」、すなわち『スローターハウス・ファイブ』は「神とのコネクションを全く持たない預言者」の伝記である。

The visitor from outer space made a gift to Earth of a new Gospel. In it, Jesus really *was* a nobody, and a pain in the neck to a lot of people with better connections than he had. He still got to say all the lovely and puzzling things he said in the other Gospels.

So the people amused themselves one day by nailing him to a cross and planting the cross in the ground. There couldn't possibly be any repercussions, the lynchers thought. The reader would have to think that, too, since the

new Gospel hammered home again and again what a nobody
Jesus was. (109)

この「新しいイエス」は「神とのコネクションを持たない人物“a nobody”」である。彼が神とのコネクションを持たないということは、すべからく、彼の行動の一切は神によって決定されておらず、彼が自らの意志によってのみ行動しなければならないことを意味する。『スローターハウス・ファイブ』が新約聖書のパロディーであるということは、全ての行動が神によって予め決定されている預言者イエスに対して、それとは正反対の預言者、全ての行動が自らの意志による「新しいイエス」の物語を創造しなければならないということである。こうした「新しいイエス」誕生のプロセスを記述しているという意味では、『スローターハウス・ファイブ』はすぐれて「パフォーマティブ／行為遂行的な」物語だと言えよう⁵。

ここで私が「パフォーマティブ」という用語で言わんとしているのは、主人公ビリーが「新しいイエス」になるためには、「新しいイエス」にふさわしい言動を行ってその資格証明をしなければならない、ということである。そして、ビリーが実際にやって見せるのは、イエスのパロディーを演じることである。既存のイエス像をパロディー的にずらすことで、そこに新しい意味を少々産み出す。これは想像以上に困難な作業で、既存のものをただなぞるだけでは新しい意味が出てこないし、新しい意味を追い求める余り既存のものから大きく逸脱してしまえば、現状の解釈枠では対応できない意味不明なものが出てきてしまう。ビリーがパロディーに拘るのは、それが産出する「新しいが新しすぎないもの」、「古くて新しいもの」にこそ現状打破の唯一の可能性が宿るからなのである。

ビリーは「神とのコネクションを持たない」イエスである以上、「新しいイエス」としてのアイデンティティーを常に構築していかなければならない。ある人間が神とのコネクションを持つ場合、彼・彼女のアイデンティティーは神という絶対的な基盤が保証する本質主義的なものになる。一方、そうしたコネクションを持たない場合、人間は自らの言動から遡及的にアイデンティティーを構築せざるを得ない。そして、「神は死んだ」ポストモダンの社会では、人間は神とのコネクションを持ち得ないのであるから、彼・彼女のアイデンティティーは必然的に構築主義的なものになる。

ポストモダン時代の構築主義的（ジェンダー・）アイデンティティーの代表的論者ジュディス・バトラー Judith Butler によれば、我々人間があるアイデンティティーをパロディー化し新しいアイデンティティーを構築する際、オリジナルとも呼ぶべき前者をいったんは殺しながら後で復活させる、ということである。そうした「起源なき模倣・生産」の反復を続けることで、既存のイデオロギーに対抗できる磁場が生まれるのだ。

[. . .] gender parody reveals that the original identity after which gender fashions itself is an imitation without an origin. To be more precise, it is a production which, in effect—that is, in its effect—postures as an imitation. This perpetual displacement constitutes a fluidity of identities that suggests an openness to resignification and recontextualization; parodic proliferation deprives hegemonic culture and its critics of the claim to naturalized or essentialist gender identities. (188)

ここでバトラーが扱っているのはジェンダーの問題であるが、この主張がジェンダー・アイデンティティーだけでなく、「新しいイエス」を巡るビリーのアイデンティティーにも適用可能なことは論を俟たないだろう。

従って、構築主義的なアイデンティティーの源泉たる「自由意志」こそがこの小説の最大のテーマであり、これの存在を大前提にしなければ、この作品は絶対に読めないのだと私は主張しているのである。人間に自由意志があるからこそ、ドレスデン爆撃のような残虐行為に対して彼・彼女らに（倫理的）責任を問い得るし、是が非でもそうしなければならないのである。確かに、ラムフォードとの対話にあったように、ビリー（と作者ヴォネガット）は一見したところでは、ドレスデン爆撃を巡る倫理的な問題に関心を示していないが、それは彼らがこの問題を議論するに値しないものだと思っているからではなく、それを議論したくてもそうする簡便な方法を持っていないからである。アメリカにおけるそうした方法の最たるものがキリスト教（宗教）だが、トラウトのSFにあったように、キリスト教それ自体が戦争という「殺人行為」を承認してきたので、ここでそれを持ち出すことはできない。再確認しておく、ポストモダンの時代において、神は文字通り「死んだ」のである。

しかし、だからといって、ビリーはドレスデン爆撃という戦争犯罪に対して手をこまねいているわけではない。（何と言っても、彼は新しい「イエス・キリスト」である。）ラムフォードとの対決の場面でも、ビリーを生きた人間だとは認めようとしない彼に対して、ビリーは精一杯の抵抗を試みている。そのキーワードが「ドレスデン」であり、ラムフォードはまさにドレスデン爆撃に関する資料を収集していたのである。ちなみに、地球においてビリーの話にまともに耳を傾けるのはこのラムフォードだけである。不思議なことに、他人の言葉に全く興味を持たな

いであろう「自己信頼の権化」ラムフォードこそが「新しいキリスト」に説教され、ドレスデン爆撃をアメリカ人に広く知らしめようとするのである。

さらに言えば、ビリーは戦争には「正しい戦い方」があることに気づいている。こうした「正戦論」はアウグスティヌスが生きた時代にまで遡ることのできる「歴史とともに古い」概念であり、その後一時的に忘却されたものの、『スローターハウス・ファイブ』が書かれた時代（出版されたのは1969年であった）には、当時進行中だったヴェトナム戦争を批判する言説として華々しく復活を遂げた「古くて新しい」ものである⁶。「正戦論」とは、「全ての戦争は悪である」とする理想主義と「戦争時には法（正義）は沈黙する *Silent enim leges inter arma*」とする現実主義の中間に立ち、「戦争にも正しい戦争があり、戦時においては正しいやり方で戦わなければならない」とする立場である。この正戦論においてビリーが特に問題にしているのは「非戦闘員保護 noncombatant immunity」という概念である。トラルファマドール星人と対峙するビリーは、「戦争」という概念についてこう切り出す。

As you know, I am from a planet that has been engaged in senseless slaughter since the beginning of time. I myself have seen the bodies of schoolgirls who were boiled alive in a water tower by my own countrymen, who were proud of fighting pure evil at the time. [. . .] And I have lit my way in a prison at night with candles from the fat of human beings who were butchered by the brothers and fathers of those schoolgirls who were boiled. (116)

この発言でビリーが暗示しているのは以下のようなことである。戦争は人間界につきものであるにしても、アメリカ軍によるドレスデン爆撃やナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺のような「非戦闘員の殺害」は許されない。なぜなら、アメリカ軍は非戦闘員を虐殺するナチス・ドイツという「全き悪 “pure evil”」の打倒を大義名分にしながら、自らもドレスデン爆撃という非戦闘員の虐殺に手を染めているからである。ナチス・ドイツのユダヤ人虐殺は「ホロコースト」と呼ばれているが、ドレスデン爆撃も一種のホロコーストである。たとえ憎き敵の打倒が最優先される戦争においても、「ミイラ取りがミイラになってはいけない」のである。アメリカが正義の軍隊ならば、どんな戦争においてもその称号にふさわしい戦い方をしなければいけないのである。

こうした正戦論の泰斗マイケル・ウォルツァー Michael Walzer は、主著『正しい戦争と不正な戦争 *Just and Unjust Wars*』において、ドレスデン爆撃や広島への原爆投下、ヴェトナム戦争時の「ソンミ村虐殺事件」といった戦争行為を犯罪だと断じている（前二者については、『スローターハウス・ファイブ』でも言及されている）。ウォルツァーはドレスデンを始めとするドイツ諸都市へのテロ爆撃を人類史上最も深刻な戦争犯罪だと捉えている。というのは、それは連合国側の勝利がほぼ決定的になった後に行われただけでなく、その後続く東京空襲や広島、長崎への原爆投下の引き金にもなったと考えられるからである（255）。この影響力を踏まえた上で、ウォルツァーはドレスデン爆撃をこう断罪する。

The city raids, it was claimed by men such as Harris, would end the war sooner than it would otherwise end and, despite the large number of civilian casualties they inflicted, at a

lower cost in human life. Assuming this claim to be true [. . .], it is nevertheless not sufficient to justify the bombing. It is not sufficient, I think, even if we do nothing more than calculate utilities. For such calculations need not be concerned only with the preservation of life. There is much else that we might plausibly want to preserve: the quality of our lives, for example, our civilization and morality, our collective abhorrence of murder [. . .]. Then the deliberate slaughter of innocent men and women cannot be justified simply because it saves the lives of other men and women. (261-62)

ドレスデン爆撃や広島への原爆投下のような「一般市民の大量殺害」は、ある程度「やむをえない“*had to be done*”」。なぜなら、それを実行することで戦争は実行しなかった場合よりも早くに終結し、そのほうがトータルでの戦死者数はずっと少なく済むからだ。こうした功利主義計算はアーサー・ハリス Arthur Harris やラムフォードのような人物がドレスデン爆撃や広島への原爆投下を正当化する際に頻繁に持ち出してくるものだが、この計算は物事を単純化しすぎている。この世の道徳法則が功利主義に基づくしかないと仮定しても（実際には全くそうではないし、私自身は功利主義の正しさを信じていない）、二つの場合の戦死者数を比較し、その「利益」を計上するだけでは不十分である。当然、そこには、我々人間が残虐行為をすることで不可避免的に引き起こす「人間性の喪失」や「文明開化度の低下」などの「損失」も含めて議論しなければいけない。そして、ビリーやヴォネガットのようなヒューマニストからすれば、そうした「損失」は先ほど計上した「利益」を大幅に上回るのである。従って、ドレスデン爆撃のような虐殺行為は正当化され

えない。自由意志に従ってその実行を決断した人物たちは罪を問われるべきである。彼らは自由意志を持つ以上、その実行が勝利に不可欠ではないことを知り、実行を思いとどまらねばならなかったのだ。

『スローターハウス・ファイブ』に対するここまでの私の読みが正しいとすれば、戦時における道徳の問題で、ビリーは功利主義者ラムフォードの言い分を反駁している。簡単に言えば、『スローターハウス・ファイブ』はそれが書かれた時代の反戦論によって復活を遂げた「正戦論」のテキストなのである⁷。ヴォネガットの視点からすると、ドレスデン爆撃はそれと同じ年に起こった広島、長崎への原爆投下だけではなく、『スローターハウス・ファイブ』が書かれているときに進行していた「北爆」とも関係しているのである。そうすると、当然、結果が未確定の「進行中の事態」と対峙している『スローターハウス・ファイブ』というテキストも「パフォーマティブ」なものにならざるを得ない。ドレスデン爆撃という第二次大戦中の自己の体験を基に、現在進行中のヴェトナム戦争に対して正戦論を演じてみせること⁸。これこそがヒューマニストたるヴォネガットの文学の要諦なのである。

おわりに

『スローターハウス・ファイブ』の冒頭で、この小説を書き終えた「私」は「大量虐殺を語り得る言葉などないので、ぐちゃぐちゃに混乱した物語になってしまった “It is so short and jumbled and jangled, Sam, because there is nothing intelligent to say about a massacre”」と告白している（19）。二度の世界大戦を経て、言葉が戦争の現実を追いつかなくなってしまう暁に、小説家はいったいどのような物語を語り得るのだろうか。こうした「小説の死」とでも形容すべき状況はヴォネガットの同時代の作家たちを悩ませた問題で、この問題は実際

に、『スローターハウス・ファイブ』の結末でも触れられている。ラジオの討論番組で「小説は死んだかどうか“whether the novel was dead or not”」を論じるために文芸批評家が集まっているが、この問いに対して、ある批評家は小説がすでに死んでいる以上、「作家はノーマン・メイラーがやったように、自己の作品を読者の前で演じなければならない“authors had to do what Norman Mailer did, which was to perform in public what he had written”」と答えている(205, 206)。改めて言うまでもないが、『スローターハウス・ファイブ』でヴォネガットはメイラー的試みを反復している。自由意志を持つ主体が正戦論を演じるテキストを書きながら。こうした目的を優先したので、この小説は一見「ぐちゃぐちゃ」な構成になっているのだ。だが、この「ぐちゃぐちゃ」はヒューマニズムを巡るヴォネガットのぎりぎりの葛藤を表象している以上、我々がすべきことはこの作品に敬意を表し、「それをありのままに精読する“So it goes”」しかないのだ。

注

- 1 『新約聖書』の「コリントの信徒への手紙 一」には以下の記述がある。

ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それは、だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです。(300)

ここで語られているのは神の意図は人間の意図の上位にあり、現世での功德が必ずしも来世での救済を約束しないということである。

- 2 前田圓はビリーのタイム・トラベル能力と自由意志の関係を論じ、タイム・トラベルによって「全知の作者」の視点を得たビリーがしようと思えばドレスデン市民に來たるべき爆撃を預言して彼・彼女らを悲劇から救い得たとするが、この解釈では、ビリーが「新しいイエス・キリスト」であり、荒野からの預言には（かつてのパリサイ派よろしく）誰も耳を傾けないので、結局のところ、ドレスデン市民は爆撃を避けられないことが見落とされている（209-14）。
- 3 こうした「決定論」的な解釈としては、ジョン・R・メイ John R. May のものがある。ただ、彼にしても、基本的に決定論的なテキストの中で、トラウトの小説『宇宙からの福音書』だけはそこから逸脱する可能性を有しているとしている（29-30）。
- 4 フロイト自身は「否定」の機能をこう説明している。

「否定」についての上のような見解は、分析において無意識の中からいかなる「否」を見つけだすこともできず、自我の側からなされる無意識的なものの承認が否定的形式で表現されるという事実と一致する。分析を受けている患者が「そんなことを考えたことはありません」とか、「そういうことは考えたことが（一度も考えたことは）ありません」というような言回しで分析に反応を示すときほど、無意識的なものの見事な発見を証明するものはない。（361）

- 5 さらに言えば、先にも触れた通り、第二次大戦での捕虜体験を経て

アメリカに帰国したビリーが精神疾患で何度か入院をしていることも、彼が自由意志を持つことの証明になり得るだろう。

Kilgore Trout became Billy's favorite living author, and science fiction became the only sort of tales he could read.

Rosewater was twice as smart as Billy, but he and Billy were dealing with similar crises in similar ways. They had both found life meaningless, partly because of what they had seen in war. Rosewater, for instance, had shot a fourteen-year-old fireman, mistaking him for a German soldier. So it goes. And Billy had seen the greatest massacre in European history, which was the fire-bombing of Dresden. So it goes. (101)

ここでビリーとローズウォーターは、いわゆる「心的外傷後ストレス障害 PTSD」とでもいうべき不安神経症を患っているのだが、そもそも、自由意志があるからこそ、先の引用にある通り、ローズウォーターは消防夫を兵士と誤認して射殺してしまった（ただし、戦場においては両者の区別は相当困難である）ことを悔い、ビリーも無差別爆撃という無慈悲な行為を責めているのである。こうした精神医学的な観点からの『スローターハウス・ファイブ』解釈には、スザンヌ・ヴィーズ・グラニ Susanne Veas-Gulani のものがあり、両者の関連性について彼女はこう述べている。

Psychiatry can provide tools for a systematic approach to the trauma visible in the novel. The psychological consequences

of the experience of war and especially the Dresden bombings can be readily analyzed using the criteria now established by psychiatrists to diagnose posttraumatic stress disorder (PTSD). (176)

- 6 正戦論の来歴については、ウォルツァーの『戦争を論ずる *Arguing about War*』を参照のこと (3-12)。
- 7 ヴォネガット研究の第一人者ジェローム・クリンコヴィッツ Jerome Klinkowitz は、『スローターハウス・ファイブ』が（期せずして）いかに時代の「空気を読む」形で出版されたのかを次のように強調している。

A novel about an atrocity such as the firebombing of Dresden would not have been received as open-mindedly had not the recent revelations of U.S. atrocities in the Vietnam War, such as the My Lai massacre and the indiscriminate use of napalm, altered readers to the fact that our side was not always above such things. (*America* 62)

「ミライ村虐殺事件 “the My Lai massacre”」とは、ウォルツァーのところでも触れた「ソンミ村虐殺事件」の別名だが、ヴェトナム戦争なくして、この小説がベストセラーになることはなかったのである。

- 8 アン・リグニー Ann Rigney も『スローターハウス・ファイブ』がドレスデン爆撃をリアルに報告する「歴史」小説でないことに注目し、それが物語をパフォーマティブなものにしていると結論

- づけている (21)。また、デイヴィッド・L・ヴァンダーウィーケン David L. Vanderwerken はこうした解釈を押し進めて、ビリーは対タリバン戦争（アフガニスタン）や対サダム・フセイン戦争（イラク）時のアメリカ国民を象徴していると主張している (51)。
- 9 このように結論づける点で、本論文はクリンコヴィッツの『スローターハウス・ファイブ』評を踏襲しているとも言えるだろう。この作品に対して、彼はこう述べている。

As far as what's required of the reader, no more is demanded than the humanism Kurt Vonnegut has found in his pet dog: a simple interest in people and their doings. [. . .] Kurt Vonnegut is not one of critic Tom LeClair's self-confident practitioners of fictive mastery, a writer of the novel of excess that intentionally smothers the reader in intellectual overkill. (*Effect* 90)

『スローターハウス・ファイブ』は、いかにもポストモダンな文学作品（『やぎ少年ジャイルズ *Giles Goat-Boy*』（1966）や『重力の虹 *Gravity's Rainbow*』（1973）など）と違って、ヒューマニズムの赴くまま素直に読めばいいのである。

引用文献

- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge, 1990. Print.
- Klinkowitz, Jerome. *Kurt Vonnegut's America*. Columbia (SC): U of South Carolina P, 2009. Print.

- . *The Vonnegut Effect*. Columbia (SC): U of South Carolina P, 2004. Print.
- May, John R. "Vonnegut's Humor and the Limits of Hope." *Twentieth Century Literature*. 18.1 (1972): 25-36. JSTOR. Web. 28 Jul. 2015.
- Rigney, Ann. "All This Happened, More or Less: What a Novelist Made of the Bombing of Dresden." *History and Theory. Theme Issue* 47 (2009): 5-24. EBSCO. Web. 28 Jul. 2015.
- Vanderwerken, David L. "Kurt Vonnegut's *Slaughterhouse-Five* at Forty: Billy Pilgrim—Even More a Man of Our Times." *Critique*. 54 (2013): 46-55. EBSCO. Web. 28 Jul. 2015.
- Vees-Gulani, Susanne. "Diagnosing Billy Pilgrim: A Psychiatric Approach to Kurt Vonnegut's *Slaughterhouse-Five*." *Critique*. 44.2 (2003): 175-84. EBSCO. Web. 28 Jul. 2015.
- Vonnegut, Kurt. *Slaughterhouse-Five*. New York: Dell, 1969. Print.
- Walzer, Michael. *Arguing about War*. New Haven: Yale UP, 2004. Print.
- . *Just and Unjust Wars: A Moral Argument with Historical Illustrations* (Fourth Edition). New York: Basic, 2006. Print.
- 共同訳聖書実行委員会. 『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』. 東京：日本聖書協会, 1987. Print.
- フロイト, ジークムント. 『フロイト著作集3 文化・芸術論』. 高橋義孝他訳. 京都：人文書院, 1969. Print.
- 前田, 圓. 『アメリカ小説の60年代：新しい語りの模索』. 福岡：海鳥社, 2006. Print.

